

〔特集：第7回国際家族看護学会とカナダ家族看護研修ツアーの成果報告〕

第7回国際家族看護学会とカナダ家族看護研修ツアーの概要

日本家族看護学会国際交流委員長

森山美知子

第7回国際家族看護学会が、カナダ、ビクトリア大学看護学部とブリティッシュ・コロンビア大学看護学部の共催で、ブリティッシュ・コロンビア州の州都ビクトリアで、2005年6月1日～4日にかけて開催されました。この度は比較的こじんまりとした開催で、参加者は14カ国から340名でしたが、日本からは66名が参加、23名25演題の発表を行い、米国について大きな集団として存在感を示しました。日本からの参加者のうち42名は本学会国際交流委員会が企画したツアー参加者であり、10名、11演題の発表を行いました。

今学会では『オープニング・スペース：家族看護に対話を』をテーマに、日本でも有名な理論家達、Feetham 博士(米国)、Hanson 博士(米国)、Wright 博士(カナダ)らの問題提起のパネルディスカッションからスタート。複数企画された特別講演では、Chesla 博士(米国)の「看護科学と慢性疾患：家族生活の苦悩と可能性の言語化」、Buchard 博士(英国)の新たな理論の試案「Ethos, Ethics and Endeavours: New Horizons in Family Nursing」、ニュージーランドの民族問題などを扱った家族看護とヘルスプロモーション「家族看護におけるハード・スポット：違いと多様性の連結」等が行われました。政策的な視点から理論開発、そして Spirituality まで幅広い講演が展開されましたが、社会構成主義や医療人類学の潮流は家族看護学にも来ており、慢性疾患等、困難な健康問題をもつ家族の苦悩、その対極にある希望や可能性を再構築する語り(narrative)が主流になりつつある様子が伺えました。一般演題では、家族のヘルスプロモーションを目指した新たなアセスメント枠組みや介入プログラム

の開発と実践の成果発表、尺度開発、家族看護領域の診断・介入・成果用語開発なども新たな動きとして目にとまりました。

本学会で特筆すべき名誉なことは、Journal of Family Nursing による表彰が行われ、理論開発や著作などによって家族看護学の発展に顕著な功績を残されたカナダと米国の5名に Distinguished Contribution to Family Nursing Award が、それぞれの国で家族看護の本を出版し、研究及び実践を通して家族看護学の発展にリーダーシップを発揮した10名(日本、スウェーデン、ブラジル、アイスランド、タイ、カナダ、スコットランド)に Innovative Contribution to Family Nursing Award が贈られたことです。光栄なことに、本学会元理事長で本学会の生みの親である杉下知子氏(三重県立看護大学)と森山美知子(広島大学大学院)が後者を受賞致しました。家族看護という共通の思いを世界のナース達と共有できる幸せと興奮を感じた瞬間でした。

国際学会に先立って行われた「カナダ家族看護研修ツアー」では、観光やカナダの伝統アフタヌーンティーに加え、ビクトリア大学 Young 博士やカルガリー大学 Wright 博士らによる講義、バンクーバーにある子どものホスピス Canuck Place, Children's & Women's Health Centre of British Columbia, バンクーバー島にある Sooke Child, Youth and Family Centre の見学と講義等、家族ケアの視点から幅広い学習を行うことができました。

カナダの美しい自然に贅を尽くしたホスピタリティ。「日本でもこんなケアができれば」ところに夢や希望を抱くことのできたツアーでした。